

偽りの英雄

@Eiji

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは英雄が活躍する物語でも主人公がハーレムを築く物語でもなく偽りが本物を知るための物語である

目次

転生	1
設定	3
幼少期編	
誕生	6
世界は必ずしも平等とは限らない	9
やはり世界は理不尽だ	12
入学式	15
夜の公園	19
前兆	22
そうだ、京都行こう	25
調理実習	33
再会	37
修学旅行1	41
修学旅行2	44
修学旅行3	47
番外編 〈鏡の世界1〉	51
修学旅行4	54

転生

突然だが目を覚ましたら真っ白な空間いた。

「ここは・・・何処だ」

確かに僕はいつも通りゲーセンで時間を潰してそれで・・・

『目を覚ましたようですね』

「ツ誰だ!!」

そこには16歳くらいの美少年が真剣な面立ちで椅子に座っていた。

『私は貴方達が言うところの神と呼ばれる存在です』

「それで神様が僕みたいな何処にでもいるような一般市民になんのもうですか?」

そう聞くと神と名乗った少年は気まずそうに口を開いた

『実は貴方は不慮の交通事故で亡くたってしまったんです』

そうか薄々自分は死んでしまったんじゃないかと思っていたが本当に死んでいたとはな

『未練はないのですか?』

「別に僕は産まれたときから天涯孤独の身なので今さら生きようが死ぬのがどうでも良かったので」

『ツすみませんそのようなことを聞いて』

そう僕の母は僕が4歳の時にがんで亡くなり、父に至ってはストレスが溜まれば直ぐ僕に暴力をふり、再婚をした後からは義母と一緒に暴行加え始めた

「別にいいですよ、それで僕は天国と地獄どっちに行けばいいんですか?」

『本来なら天国か地獄どちらかに行ってもらいますが貴方は若くして亡くたったので転生という形になります』

「転生?特典はつきますか?」

『はい 3つまでなら貴方の好きな特典を与えることができます』

「それなら一つ目は全アナザーライダーの力をください」

『アナザーライダー? 仮面ライダーではなく?』

「はい」

『わかりました、それでは残りの二つはどうしますか?』

「それでしたら二つ目は天才レベルの才能、3つ目は主人公補正並みに強力な運で」

『はい、それでは準備が整ったのでそろそろ新しい世界に送りますね』
「わかりましたそれとありがとう」

そう言うのと次第に視界がぼやけてきた

『やつといきましたか、それにしても彼の過去はとても興味深い点が多く見られますね』

神と名乗った少年は主人公：木場翔（きばかける）の過去の出来事を見て面白そうに微笑んだ

『まあ精々私いや俺を楽しませてくれよ木場翔』

『さてとこれからあいつの人生を見守らねええとな』

少年は新しい玩具を手に入れた子供のような笑みを浮かべていた

『そうすると他にもっと転生者を集めないとなあ』

少年はさつきまでの子供のような笑みとは違って変わって不気味な笑みを浮かべていた

『あいつの時みたいに殺さないといけないのかあ』

「何で…俺は此処に」

さあ転生者を俺の望むシナリオ道理に導かないとな

『目を覚ましたようですね』

「貴方は一体」

『私は貴方達が言うところの神と呼ばれる存在です』

俺のシナリオ道理にな

設定

【設定】

【木場翔（きばかける）】

本作の主人公前世は4歳の時に母親ががんで亡くなっており、父親と再婚した義母に暴行を振るわれるという過去を持つ。父親と義母は主人公に暴行を振ったことがばれ暴行罪で警察に捕まる。それ以降主人公は、孤児院で暮らすことになる。

【原作開始時設定】

年齢17歳

誕生日4月28日

学校羽丘学園（共学）

学年2年生

【容姿】

黒髪黒目の10人中8人がイケメンだという容姿だが本人はその自覚がない。（鈍感ではない）

学力 全国トップクラス

身体能力 世界記録の一步手前

【今世】

今世の主人公はすでに両親は交通事故で亡くなっている（表面上は）、両親の残してくれた家と財産で暮らしている。

財産 無駄使いしなれば一生遊んで暮らせるレベル

家 三階建ての7LDK

【特典】

全アナザーライダーの力

主人公補正並みの強力な運

天才レベルの才能

【性格】

特別性格がひねくれている訳でもなく、正義感が強い訳でもない、いわば無愛想の分類に属する性格

【結城当麻（ゆうきとうま）】

本作の二人目の転生者、前世は人にも環境にも恵まれたまさにラノベの主人公見たいな人生を歩んでいた。

ただ結城当麻は良くも悪くも鈍感で相手が恵まれていないことや自分が恵まれていることに全くきずかない。

そのためよく誤解を招きやすい。

【原作開始時設定】

年齢16歳

誕生日7月7日

学校花咲川学園（共学）

学年2年生

【容姿】

金髪碧目の殆どの人がイケメンだという容姿本人はイケメンだという自覚はない（鈍感）

学力 学校内トップ

身体能力 部活でレギュラーは確定レベル

【今世】

今世の結城当麻は前世と変わらず人にも環境にも恵まれた人生を歩んでいる。両親共に健在で父親は外交官、母親は弁護士。

【特典】

とある魔術の禁書目録から未元物質とピンセット

f a t e から無限の剣製

保留（結城当麻が決められなかったため）

【性格】

正義感が非常に強く自分が決めたことは何がなんでもやり遂げようとする。

【天鎧光輝（てんがいきこうき）】

本作三人目の転生者、前世は才能に恵まれており基本的に自分よりスペックが下の者は見下しそれを当たり前のように受け入れていた。（なお性格はストーリーが進むに連れて変わります）

【原作開始時設定】

年齢 15歳

誕生日 10月31日

学校 羽丘学園

学年 1年生

【容姿】

銀髪碧目の10人9人がイケメンだという容姿だが性格が残念なため全くモテない

学力 全国トップ

身体能力 努力すれば余裕で世界記録を出せるレベル（努力せずだと世界記録を出せるか出せないかレベル）

【今世】

今世の天鎧光輝は前世と変わらず自分より下の者を見下していたがある日、一人の天才と出会い変わっていく。

【特典】

f a t e から王の財宝

O N E P I E C E からヤマヤミの実

ソードアートオンラインからキリトのSAO時代の身体能力（ゲーム内）と記憶（ソードスキル付き）

【性格】

親の影響でエリート意識が非常に強く、そのため幼少期からスペックが下の者を見下すようになる。

幼少期編 誕生

(…きて…い…)

(起き…ださ…)

んうゝ何？

(起きてください!!)

ッ!!

(ふうーやつと起きましたか)

あんたはあの時の

(そうです、貴方を転生させた神です)

まさかと思うが転生に失敗して…

(違いますよ今貴方は母親のお腹の中に要るんです)

そうか、そうすると僕の特典はどうなってる？

(はい貴方が特典に求めた強力な運も天才レベルの才能も全アナザーライダーのアナザーウォッチも既に与えています)

だがちよつと待て、ならなぜ今世の僕に話しかけて来るのか教えてくれないか

(ッ!!それは…わかりました実は貴方の今世の御両親は数年後交通事故で亡くなってしまふのです)

なんだとそれは本当の事なのか

(……………)

答えろ!!!

(…はいすみません)

いや僕も怒鳴って済まない

(ですが…これは仕方のない事なのです)

どういふことだ

(…世界は常にバランスを保とうとします、元々この世界は怪物況してや異能など存在しない平和な世界でした、ですが…この世界に貴方や他の転生者が異能を持って転生することによって…世界が

バランスを崩し始めました、その結果の一つが貴方の御両親の交通事故です)

そうか全ては僕のせいなのか…。いやまて僕以外にも転生者が要るのか？

(はい数人ほど貴方と同じようにこの世界に)

なるほど、そもそもこの世界はどういう世界なんだ？

(この世界はBand Dreamの世界ですけど)

なんだそれは

(えっBand Dreamを知らないんですか！)

ああ聞いた事もない

(そっそうなんですかー)

で、どういう世界なんだ

(分かりやすく言えば、王道から本格的なロックまで個性豊かなバンドが様々ストーリーを経て成長して行く物語ですね、スマホゲームも出ていて、最近ではfilm liveもやっていますからね)

見るからに平和、そんな世界だな

(でも貴方達、転生者というイレギュラーが介入したことにより平和かどうかはわかりませんけど)

具体的にはどんなところが改変されたんだ？

(例えば、普通に一般市民が仮面ライダーダブルのドーパントや仮面ライダービルドのスマッシュになったりする可能性が高いです)

確定ではないのか？

(はい神と言つても未来を見れる範囲には限りがありますからね、元々私は未来予知は得意な方じゃありませんからね)

そうか質問に答えてくれてありがとう

(いえいえあつそろそろ産まれる時間ですよ)

(それでは)

ああ

〜病院〜

「オギャー オギャー」

「ああありがとうありがとう」

「ふふ、何よあなた泣いて要るの？」

「だって仕方がないじゃないか」

「それよりあなたこの子の名前決めてあげて」

「俺が」

「はい」

〜10分後〜

「決めたぞ！」

「それでこの子の名前は？」

「翔、木場翔だ」

「翔良い名前ね」

僕達はまだ何も知らなかった今日この出来事が全ての始まりだと
言うことを

世界は必ずしも平等とは限らない

僕の名前は木場翔、転生者ということ以外は何処にでもいる普通の少年だ。

突然だが僕が産まれてから4年の月日がたった。

父「おい、翔く」

翔「ん？何く父さん」

父「ちよつと父さんと母さんは出掛けて来るから留守番頼むな」
ああついにこの日が来てしまったのか

翔「うん分かったよ父さん」

く30分後く

母「じゃあ留守番お願いね」

父「出かける時はちゃんと戸締まりはしっかりしとくんだぞ」

翔「分かったよ 行ってらっしゃい」

父、母「行ってきます」

く20分後く

よし行つたか、さてと神は世界は常にバランスを保とうとすると
言つてたかからな、逆に言えば異能で崩れた世界のバランスを修正出
来ると僕は考えた。

そう言えば言うのを忘れたが全アナザーライダーのアナザー
ウォッチは僕の特典の影響か、アナザーライダーの能力が大幅に
強化されている。

翔「さて、両親の事故を防ぐか」

《ワイザード》

《テレポート》

～高速道路～

父「はあ～ 翔も連れて行きたかったが明後日は翔にとって特別な日だからな～」

母「そうね明後日のためにプレゼントを用意したし、あとは祖父母や親戚を呼ぶだけね」

そう明後日は僕の誕生日なのだ、しかしなぜだ何が原因で交通事故が起きるんだ？

～30分後～

父「なんだあれは」

母「何かしら」

??? 「ギャハハハ、雑種風情が我に楯突くからこうなるのだ!!!」

銀髪の少年？がそう言うのと黄金の波紋が百近く現れ、辺り一帯を吹き飛ばした

父母「うわあああああ／きやあああああ」

翔「…ど、どういことだよ」

いや本当にどういことだよ… 交通事故じゃないのか？

翔「そ、そうだよ父さん… 母さん 嫌、嫌だよ死なないでよ」

??? 「フハハハハハ 雑種どんな気持ちだ これは終わりではないこれは始まりだ 貴様と我の戦いのな」

翔「お前はそれだけのために僕の両親を殺したのかよ」

??? 「そうだ」

… ぎけ… な

ふざけ…

ふざけるな!!!

《ジオウ》

翔「ふぎけるな!!!」

??? 「さあ せいぜい我いや俺を楽しませてくれよ」

翔 「ウオオオオオ」

翔 「…… ハッここはそうだ僕は」

僕は奴と戦ってそれで

プルルルルル

翔 「はい…… もしもし」

『ツ貴方は木場翔様でしょうか』

翔 「はいそうですけど」

『警察です…… 貴方のお父さんとお母さんの殺人事件について今すぐ

〇〇病院に行けますか?』

やはりあれは夢では無かったのか

翔 「はい！行けます」

『それでは此方から迎えの者を手配するのでしばらくの間自宅で待機
しててください』

僕はこれから警察に聞かされることに動揺を隠せなかった

やはり世界は理不尽だ

僕はその言葉の意味を理解するのに少しばかり時間がかかった。

翔「ちよつと待って、くださいという事ですか僕の両親は間違はなく殺されたのにそれを無かったことにしろって!!!」

警察『済まない、こちらも事件を隠蔽はしたくないのだが隠蔽せざるおえない理由があるのだ』

翔「ふざけないでください!!!何なんですか人の死を僕の両親の死を無かつたにして良い理由なんてどこにあるんですか!!!」

警察『別に死を無かつた事にするつもりは無いよただの事故死と言う事にするだけだ』

翔「事故死?無理があるでしょあんたもあの現場を見たなら分かつてるはずだ!」

警察『残念だが証拠が完璧に消されていてね、警察も手の打ちようがないのだよ』

翔「ハハッ証拠が消えたあんなにも被害があつたのに消せる訳がないでしょ」

警察『なら現場写真でも見るかい?』

翔「ああ見せてくれ」

僕は写真に写ってる光景に頭が真っ白になった

翔「...何も被害がない?」

そうあんなにも武器を飛ばして辺りに甚大な被害をもたらしていたのに被害らしい被害が見当たらないのだ

警察『これで分かっただろ、事件として調べようとしても、真相は掴めないんだ、お金の方は心配するな、御両親が君のために家も財産も残してくれていたのだ、それに君が義務教育を終えるまでは政府が最大限協力する、君の祖父母も君が高校に入学するまでなら君を引き取ってくれるらしい。そして木場翔君本当に済まなかつた無力な私達警察を許してくれ』

そう言う警察官は帽子を脱ぎ僕に向かって土下座をした

翔「...もう良いんです、今頃両親が生きてたら過ぎたことは気に

するなど笑っていきそうですからね」

警察『ツ本当に済まない』（私は何をやっているんだ子供にこんな顔をさせといて何が警察だ）

…
もうどうでも良い

～自宅～

翔「僕は一体何をやっているんだ、守るための力を全く使いこなせずこの世界は平和だと勝手に解釈し、力を鍛えると言うことを忘れていたのかもしれない」

よし… これからは鍛えよう鍛え続けよう誰にも負けない強さを手に入れるために。

… 木場翔戒めとしてこの事件を心に刻んでおけそして周りが忘れても僕だけは絶対に忘れるな。

そして、人を絶対に信じるな…

はあ… 明日から忙しくなるな…

～神side～

神『んく久しぶりに遊んだなく、思ってたよりは楽しめたかな』

神『でももやっぱり人の身体を借りて戦うのはなれないなく さて木場翔の両親は殺したし更に面白くなりそうだなあ』

神『にしても次戦う時はいつかなあ今からとてもワクワクする

よお
』

神は三日月のような不気味な笑みを浮かべた

入学式

前回あらすじ、Band Dreamの世界に転生し永遠にも感じられる平和な時を過ごしていた木場翔。

突如、両親が出掛ける事になり留守番をすることになる。

だが、木場翔の中には一つの不安があった。

その予感は見事に的中した。

しかし、神の予言とは別の出来事が起きた。

少年？が両親を殺した事に怒りや不安や動揺の入り交じった感情が襲った。

木場翔はきずいたら自宅のベッドの上にいた。

そして夢だったのかと僅かな希望が木場翔の中には芽生えた。

だが、警察官から両親の死について、話しがしたいと一通の電話がかかってきた。

警察官は両親の死を事故死にしてほしいと言ってきた。木場翔の中には不安と怒りが入り交じった謎の感情が生まれその感情と葛藤していた。

結果として木場翔は祖父母に引き取られ、両親の死は事故死になった。

木場翔は後悔した、守れる力があるのに守れなかった事にそして木場翔は強さを求める道を選んだ、誰かを信じることを止め。

〈木場翔side〉

あれから3年の月日がたった、読者の皆はおい幼稚園はどうしたと言いたい所だろう、別にこれと言った出来事が無かったから上げなかつただけだ強いて言うならアナザージオウの未来予知でジャンケ

ンを連勝したり、あまりにうざい幼稚園児が居るものだから周りにはバレずに締め上げただけだ。

因みに今僕は祖父母の家に暮らしている、前世のように虐待のようなことは無いから安心しろ。

あと、明日は〇〇小学校の入学式だ、はあもう一度小学校の入学式を体験することになるとは思わなかったけどな。

そろそろ寝るか。

く朝く

翔「ふああく」

うん？もう朝か

目覚まし時計6：00

祖父「おい翔、もうそろそろ入学式の時間じゃぞ用意はもう出来たのか？」

翔「いやお爺ちゃんまだ6時だよ」

そう言つて祖父に目覚まし時計を見せる

祖父「それなら掛け時計を見てみる」

そう言つて祖父は掛け時計を指差す

7：50

えっ

7：50

翔「遅刻ギリギリじゃん！」

祖父「だからさつきからそう言っているだろ」

翔「いつ急ぐよお爺ちゃん」

祖父「ちよつちよつと待て儂はもう若くは無いんじや」

祖母「あら、翔君そんなに急いでどうしたの？」

翔「あっお婆ちゃん今日、〇〇小学校の入学式なんだでも寝坊しちゃって、今急いでいるんだ」

祖母「翔君が遅刻それは大変じゃない、はいこれランドセル中に筆記用具や必要な物は全部入っているから」

翔「ありがとう、それじゃ行ってきます」

祖母「はい行ってらっしゃい」

〇〇小学校へ

翔「はあ遅刻するところだった」

祖父「全くだからあれほど早めに寝ろと言ったじゃろ」

確かに僕は夜更かしをしたが、それは別に入学式が楽しみだったからではない、アナザーライダーの力を強化するために夜遅くまでに特訓をしていたのだ

「あはは、次からは気を付けるよ」

「反省しているのならもう良いとつとと体育館へ行くぞ」

体育館

校長「えーこれからは皆さんは長い人生の中で色々大切な……」

〇〇入学式終了

えっ早すぎるって？

仕方がないだろう一体何が悲しくて知らないお爺さんの長話をずっと聞かなきゃいけないのだ

因みに今は教室でクラスメイトの皆が自己紹介をしている

担任「それじゃあ木場君自己紹介頼めるかな？」

おや、僕の番のようだ

翔「はいわかりました」

翔「初めまして、僕の名前は木場翔って言います趣味は読書です一年間よろしくお願いします」

担任「ありがとうございますねえくそれじゃあ次は…」
さて、しばらく寝るか

・
・
・
・
・
・

??? 「おい」

んうなんだ？

??? 「起きててっば」

誰だ僕を起こすのは

??? 「あつやと起きた」

翔「誰だい？君は」

??? 「もおく、自己紹介聞いて無かったの？」

翔「ああ済まない聞いて無かった」

リサ「じゃあ自己紹介するね☆アタシの名前は今井リサよろしくね

☆翔

翔「ああよろしく」

これが僕と彼女との出会い

夜の公園

突然だが、僕は今夜の公園にいる。
あまりに唐突だったので理由を話そうあれは数時間前に遡る。

↳数時間前↳

あの出会いから僕はよくリサと良く一緒に遊ぶようになった、そのせいか友希那を紹介された。

僕も人のことを言えないが最初は友希那のことを無愛想だなと思っていたが猫好きだったり、案外ポンコツだったりと以外な一面からすぐ打ち解ける事が出来た。

この出来事を切っ掛けに僕とリサと友希那と一緒に居ることが多くなった。

それにしてもリサさんあんたコミュ力高過ぎじゃあないか？。

それはさておき、いつも通り三人で話しをしていたら リサが突如こんなことを話し始めたのだ。

リサ「ねえ〜友希那〜翔〜」

翔「なんだ？」

友希那「何かしら？、リサ」

リサ「いやあ〜、何か都市伝説みたいなんだけども、月の15日の夜の0時に公園に行くと殺人鬼が出てその夜の0時から3時まで5人の人を殺すって言う噂なんだけど、一緒に確かめに行かない？」
殺人鬼？そうか、これが僕や他の転生者がこの世界に産まれた事によって起きてしまったイレギュラーか。

友希那「嫌よ、第一そんな時間帯に親が外出を許可してくれると思う？」

翔「確かに今回は僕も友希那の意見に賛成だ、万が一その噂が本当なら僕らの命が危ない」

リサ「ちえ〜、ならさ今日一緒にモールに遊びに行かない？☆」

友希那「まあ、それくらいなら構わないわ」

翔「僕も暇だし、別に良いかな」

リサ「よおくし☆、じゃあ帰ったら直ぐモール集合だね」

友希那／翔「分かったわ／ああ構わない」

く回想終了く

このような事があつたのだ。

都市伝説が本当ならもうそろそろ、来るのだがな。

「グウオオオオオ」

ツ着たか！

《arms》

とUSBメモリらしき物から電子音が流れ、男がUSBメモリを身体に挿すと身体の構造が急速に変わり武器の記憶の異形、アームズドーナントへと変身した。

ツガイアメモリ!!やはり、都市伝説は本当だったようだな被害が出る前にドーナントを倒さないとな。

ドーナントと言ったらやっぱりこいつか？

《ダブル》

と電子音が流れ右が緑、左が黒の異形へと変身した

アームズドーナント『キサマア、ナニモノダア』

アナザーダブル『不味いな、奴はかなり長い時間ガイアメモリを使用し続けているようだな』

アームズドーナント『キイテイルノカアア、シツモンニコタエロオ』

アナザーダブル『そうだね、僕のこととはアナザーとでも呼んでよ』

アナザーダブル『それじゃあ、こっちも質問するね君が噂の殺人鬼君で合っているかな』

アームズドーナント『アア、オレハウワサジャサツジンキでトオ―テツルノカ、ナラソウダ』

アナザーダブル『それなら悪びれてるのかい?』

アームズドールパント『ナンデエオレガウルビレナイトイケナイン
ダア、オレハコロシタイカラコロシタ、ヤツラハニゲタイカラニゲタ、
オタガイヤリタイコトヤツタダケジャナイカ』

…そうかこいつは元々こういう人だったのか

アナザーダブル「…もういい」

アームズドールパント「アア?、マアイドウセテエメハココデシヌ
ンダカラナア」

そう言うアームズドールパントは自身の能力で作り出した アサ
ルトライフルをアナザーダブルに撃つ

アナザーダブル「チ面倒な能力だな」

だが、それだけだ!!!

アームズドールパント「ナツナゼダナゼアタラナイ?」

アナザーダブル「テエメの攻撃がワンパターン過ぎるんだよ」

アームズドールパント「ナンダド!」

アナザーダブル「これで終わりだ」

《Violence》

アナザーダブル「ライダーパンチ」

アームズドールパント「グオオオオオ」

アナザーダブル「メモリブレイク成功か、さてあいつからガイアメ
モリと僕についての記憶を消すか」

《クイズ》

アナザークイズ「ちよつと脳に負担がかかるけど我慢してね」

男「アアアアアaaaaa!!!」

アナザークイズ「さてと記憶も消したし帰るか」

その時僕はまだきずいていなかった物陰から僕を見つめている男
の存在に

前兆

く??? side

??? 「ハハハハハハ、凄い凄いぞ最高だ!!!これかだこれからだぞ俺のハーレム物語は、なあそうだろうドライブ」

ドライブ 『……』

??? 「チイ、黙りかまあ良い、禁手化（バランス・ブレイク）には至っていないが神器（セイグリッド・ギア）は発現しているんだ禁手化に至るのも時間の問題だろ、なんたって俺は神に選ばれたオリ主なんだからな！」

『Boost!!』

と赤龍帝の籠手の音が夜の町に鳴り響く

く翔side

…… ハッ何か嫌な予感がする。

神 『お久しぶりですね』

その声神か、と言うかここは何処だまさか俺また死んだって落ちじゃないだろうな

神 『いえ、そうじゃないですよここは貴方の意識の中だと思ってください』

それで、僕に何のようだ？

神 『それがですねこの前転生者をそちらの世界へと送り込んでしまったんですよ』

なるほど転生者が増えたのか、それでまた世界に

イレギュラーが発生してしまったと言いたいのか？

神 『それもあるんですけど、もっと不味い事態になってしまったって何、もっと不味い事態だと？』

神 『はっはい実はその転生者貴方達とは違ってその、良からぬことを考えているようですよ』

はあなるほどな大体分かったそれでそいつが選んだ特典は？

神『転生者の名前は赤龍院帝（せきりゆういんみかど）、特典は鍛えれば鍛えるほど成長する身体、大量の魔力、赤龍帝の籠手です』

最初の二つ目と三つ目の特典は分かったが最後のやつは何なんだ？

神『赤龍帝の籠手は自身の力を10秒ごとに倍加出来、他人に倍加した力を他人に譲渡できる赤龍帝からの贈り物と言う力をもった二天龍と言う神よも殺せる龍を封印している籠手です』

確かに強力だか、話を聞く感じ、時間がたつ前に倒せばいい話じゃないのか？

神『確かに今はそうなんですけど、禁手化と言う一種のパワーアツプに至ってしまうと倍加に時間がかからなくなってしまふんですよ、それに覇龍になってしまったら私達神を簡単に殺せるレベルになつちやうんですよ』

なるほど、対抗策は用意してあるんだよな

神『はいもちろん用意はしていますけど、それを貴方にやって欲しいんです』

はあ!!何でだ?その対抗策を自分で使えば良いじゃないか

神『いえ、元々赤龍帝の籠手を初めとした神器は人間にしか宿せないんですよ』

……分かったで俺は何を使えば良いんだ

神『赤龍帝と対等に渡り合え、二天龍とも呼ばれた白龍皇を封印した白龍皇の光翼を宿して欲しいんです』

そう言うことか二天龍には二天龍をとつてことだな、だが白龍皇の光翼は何の能力を持っているんだ？

神『それは……???'私』が説明しよう』

お前は

アルビオン『我が名は白い龍（バニシング・ドラゴン）、アルビオン・グウィバー我が能力は10秒ごとに相手の力を半減しその力を吸収し己の力とする』

チートだな

アルビオン『貴様が今回の宿主か、力としては申し分無いな、精々

赤いのと戦う前に死ぬなよ』

そう簡単には死なねえよ、まあ取り敢えずよろしくなアルビオン
アルビオン 『ああよろしくな翔』

神 『それでは一ヶ月後に赤龍院帝は○○小学校に転校して来るので
その際は感ずかれない様に気を付けて下さいよ』

ああ分かった

そう言うと言意識が徐々に覚醒し始めたのだ

そうだ、京都行こう

突然だが、君達読者は有名子役が誘拐されている場面を見かけてしまったらどうするだろうか。

はあどうしてこんなことになってしまったのか、時は一週間前に遡る。

～一週間前～

カランカランカラン

モブ「おめでとうございます!!そちらのボウヤは特賞を引き当てたので京都で家族二泊三日の温泉旅行にご招待します!」

／ワアアアアアア／

マジかよ

～自宅～

祖父「何、福引きが当たったから温泉旅行に行こうじゃと、……：良いだろ」

祖母「まあまあ良いわね、それで日程は何時にしようかしら?」

祖父「そうじゃな、荷物の準備もあるだろうし大体4日後くらいにしよう、翔も良いか?」

翔「うん分かったよお爺ちゃん」

～当日～

～車内～

てか、今思っただけどドラゴンってホテルに連れてきて良いの？
アルビオン『身体の中に宿ってから大丈夫だろ』

あつそっか、ねえアルビオン

アルビオン『ん？何だ』

禁手化ってどれくらい持つの？

アルビオン『そうだなこれから使用時間が増えるだろうが大体今の状態だと、3、4日って所だろう』

そっか、まだそれしか持たないのか

アルビオン『それにしても翔の身体はおかしいぞ、神器に目覚めて一週間で禁手化に至るなんて』

そうかな、普通に鍛えたら至ったけど

アルビオン『それがおかしいのだ、正直翔は成長速度は歴代最速だぞ』

へえ、僕の成長速度ってそんなに早いのか

祖父「おい、ついたぞ」

祖母「まあ立派なホテルね」

翔「うん、そうだね」

祖父「ふん、さっさと行くぞ」

その後僕は祖父母と別れそれぞれ別行動を取っている。

別にハブられた訳ではない、単純に僕が行きたい所と祖父母の行きたいところが違うだけだ。

そのため、アナザークイズの能力を使って脳内をちよつとだけ操作して、僕と別行動しても不自然じゃないと祖父母の考えを変えた。

確かに良心は痛むがこれから起きるであろう戦いに祖父母を巻き込む訳にはいかなからな。

読者の皆も気になっている事だろうが、今は小学二年生の夏休みな

のだ。

ん？なにやら人だかりが出来ているな。

なるほど、この場所のはぐれ剣客人情伝のロケ地らしい。

確かに京都は昔ながらの日本の古き良き文化が数多く残されているからな時代劇の撮影現場としてはかなり定番だろう。

スタッフ「千聖さん五分前出番です」

千聖「はい、わかりました」

ん？あれが天才子役白鷺千聖か、生で見るとオーラ凄いな、将来絶対に綺麗な方の美少女になることは間違いないだろうな。

おっと、あまりにも撮影現場を見ることに夢中になって本来の目的を忘れる所だったよ。

アルビオン『本来の目的？』

おい、折角京都に来たんだぞやることと言ったら一つだ　ろ。

アルビオン『？』

観光だ！

アルビオン『そつちか』

逆にアルビオン京都に旅行に来てやることって何だよ？

アルビオン『いや、世界は必ずしも平等とは限らないと夜の公園の時みたいに戦闘回かと思っただのか』

おい、アルビオンメタイぞ　てかアルビオンその時お前僕の中に宿って無いだろ。

アルビオン『いや、自称神が見せてくれたからな』

マジかよ、あの神様何でもありだな

アルビオン『お前が言うな』

く翌日く

話が飛びすぎ？

仕方ないじゃないか、子供一人とドラゴン一匹が単純に旅行を楽し

んでる画を見ても何も面白く無いだろ

祖父「おい、翔よ」

翔「なんだいお爺ちゃんこんな朝から」

祖父「いや、今日くらいは三人で一緒に観光しないか」

そう言えば祖父母とあまり、家族ほいことしたこと無かったけ？

翔「うん、良いよお爺ちゃん」

・
・
・
・
・
・

祖母「あら、随分と遅かったわね」

翔「うんちよつと準備に手間どっちゃって」

祖父「それじゃあ行くぞ」

それから祖父母と金閣寺や銀閣寺、二条城などに行つた

この旅行の中で一番驚いたのは祖父が案外京都の町ではしゃいでることであろう、今思えば僕は祖母のことを知っているようで知らなかったのかと、自覚させられてしまう。

祖父「翔、次は八坂神社に行くぞ！」

翔「はいはい」

はあ……たまにはこうゆうのも悪く無いか

～夜～

つつ疲れたーなんだよお爺ちゃんあれ絶対に老人の体力じゃないだろ

はあコンビニでエナドリでも買うか

～コンビニ～

店員「ありがとうございますー」
ついエナドリ以外にも余計な物買ってしまったな。

「は、離して下さい警察呼びますよ」
「うるせえ、黙ってついてこい」
「きやあああ」

うん何かめちやくちや物騒な会話が聞こえたな、無視するかどうせ警察がどうにかしてくれるだろう。

アルビオン『いや、これは警察でも対処出来ない事件かも知れないぞ』

なに、どういうことだ？

アルビオン『良いか助けに行ったらどうだ昨日見かけたことがある人間だぞ』

あれは！白鷺千聖……仕方ない面倒ごととは嫌いだが放置したら逆に面倒そうだな

翔「おじさん達何してるの？その女の子を連れて」

男1「ツクソ、ガキに見つかっちゃった」うん、あのね坊やおじさん達はこの子を家まで送らないといけないんだ」

翔「へえ、ねえそこの君本当にそうなの？」

千聖「えええつと」

翔「大丈夫、怖がらずに落ち着いていってごらん」

千聖「おっお願い、助けて！」

男2「チツガキが余計なことしやがって」

翔「どっかの誰かが言ってたよ」

男3「ああん？」

翔「余計なお世話はヒーローの本質だつてね」

男1「ヒーローごっこならよそでやれ、チイお前らあのクソガキを殺せ」

男4「分かった」

そう言う男達はポケットからガイアメモリを取り出した

《masquerade》

マスカレイドドーパントか、能力的には大したことないが。

千聖「ヒツイ」

芸能人とはいえ、子供からしたら怪物なんて只の恐怖の対象ではないか。

男1「やれ」

マスカレイドドーパント2・3・4『ウオオオ!!!』

仕方ない、アルビオン準備は出来てるか？

アルビオン『ああ問題ない』

なら、やるぞ！

翔「バランス・ブレイク!!!」

『Vanishing Dragon Balance Breaker』

と音声が鳴ると翔の身体は白龍を模様した鎧に包まれる

男1「なっなんだその鎧は」

千聖「…綺麗」

男1「まあ、所詮は見かけ倒しだやれ！」

一番ヒビってたのお前じゃないか？

アルビオン『そう言うな、相手も必死なんだろう』

それもそうだな

男2・3・4『ウオオオ!!!』

白龍皇（翔）『貴様らは力の差が分からない弱者か、一思いに圧倒的力で終わらせてやろう』

『Divide』

男2『力が抜けていく貴様、何をした!』

白龍皇（翔）『何ちよつと貴様らの力をこの僕の糧としただけだ』

男3『チートが!!!』

やっぱ普通そう思うよな

白龍皇（翔）『まあ一瞬終わるから安心しろ』

男4『何を?』

《weather》

と音声が生音が鳴るとマスカレイドドーパント達の周りに巨大な竜巻が現れそのまま、マスカレイドドーパント達をその中へ呑み込んでいった

男1「なっ何が起きている」

男2・3・4『グアアアアアアア』

白龍皇(翔)『貴様ら奪った力をこのメモリと組み合わせた、だから行っただろ、一瞬で終わるってな』

白龍皇(翔)『あとは貴様だけだな』

男1「ヒツイヤツやめろ来るな!!頼む見逃してくれ金ならいくらでも出すだから」

白龍皇(翔)『そうだな、お断りだ』

《スリープ》

白龍皇(翔)『しばらく眠っておけ、時期に警察が来る』

翔「大丈夫だったかい?」

千聖「う、うん大丈夫」

と言っているが今にも泣きそうだ

翔「はあほらハンカチ」

とハンカチを手渡す

千聖「う、うわああああん」

やっぱり子供だな

〜8分後〜

翔「落ち着いた?」

千聖「うん、ありがとう」

翔「じゃあ僕はこの辺で」

千聖「まつ待ってハンカチ…」

翔「あつ別に良いよ君が持っていて」

千聖「でっでも」

翔「ああーじゃあこうしよう、いつかそのハンカチを僕が取りに行くそれまでは君が持っていて」

千聖「じゃあいつ会えるの?」

翔「うーん、僕が君を見付けやすいように君は有名になって、そうすれば僕は君に会えると思う」

千聖「分かった！、私絶対に努力して有名な女優になる」

翔「じゃあ約束だね」

千聖「うん！、約束」

千聖「あれ、君名前は？」

翔「そうだな、まだ本名は教えられない」

千聖「えく何で？」

翔「次会うときに本名を言うよ、それまでは僕のこととは白龍と呼んでくれ」

千聖「分かった!!!私の名前は白鷺千聖よろしくね白龍!!!」

翔「よろしく、千聖」

翔「そろそろ警察が来るから僕のこととは誰にも言わないでね」

千聖「待って!!!」

《テレポート》

千聖「・・・行っちゃった」

彼と彼女が出会う未来はそう遠くない未来の出来事かも知れない

調理実習

あれは平和な午前中、調理実習の時間の時である。

〈家庭科室〉

家庭科の教員「それでは今日はホットケーキを作ることになった、各自真剣に取り組むように」

／はーい／

ホットケーキ、それは小麦粉や卵を使った一般家庭で美味しく、尚且つ簡単に作れる洋菓子である。

また、アレンジも出来るため案外飽きの少ない食べ物の一つでもある。

正直に言って嫌いじゃない。

因みに僕の班はこうなっている。

木場翔

今井リサ

湊友希那

阿部巧（あべたくみ）

知らない名前の奴がいると思うが、阿部巧とは一年生の時からの友達である。

まあ少し欠点もあるが…

リサ「じゃあ☆、ホットケーキ作って行こうか♪」

そう言えばリサは両親が共働きであり家に帰って来ないから、料理出来たんだっけ？

友希那「ええやるからには完璧にね」

でも感だがお前結構事故りそうだけだな

翔「卵に砂糖を加えてよく混ぜますだつて」

リサ「まず、卵を割らないとね♪」

巧「リサそれは俺に任せてくれないか」

リサ「いいけど何で？」

巧「俺は、片手で卵を割れるからな！」

あつこれ結末見えたぞ

巧「フンツ！」

バキッ

巧「ああ〜ボールに殻がはいちやつた」

はあ何をやってんだ

これで分かつたと思うが巧はかなりのカツコつけなのだ

〜五分後〜

無事に殻を取り除いて、砂糖を卵のなかに加えた。

これ以上災難は起きないだろう

友希那「次はボールのなかに溶かしたバター、牛乳、バニラエッセンスを加えて更に混ぜるのね」

友希那「溶かしたバターつて言っていたけれど、普通のバターをも
う入れちやつたわ」

アホだこいつ

友希那「どうしようかしら」

巧「レンジに入れればいいんじゃないか？」

友希那「それもそうね」

翔／リサ「あつやめろ／やめて それは金属ボール」

巧「何か光ってないか？」

友希那「そうね何でかしら？」

あつこれ爆発するやつだ

／ドカアアアアン!!!／

（10分後）

あれから友希那は巧は家庭科の教員に叱られ、放課後残って反省文を書くようにと言われた。

巧「よし、急いでやろう」

友希那「ええ、まず生地作りからね」

で、出来上がった物がこちらになります。

友希那「あら、もうできていたのね」

巧「リサと翔が作ったのか結構上手く出来てんじゃん」

おい、お前結構だと？生地を作る時点でレンジ一個ぶっ壊してるお前らが？

まあ良いホットケーキ作りにおいて難しいのはこれだからかな。

リサ「なーにもう料理した気になってるの？本番はこっからじゃん」
♪

巧「何、こっからが本番だと！これ以上難しいとなると家庭科室が殺人現場になるぞ！」

物騒なことを言うな

友希那「そうねいくらリサでも冗談が過ぎるのじゃないかしら？」

翔「まあお前らは見てろ」

友希那「じゃあそうさせてもらおうわ」

巧「それなら、なら俺も」

翔「まず、フライパンにうすくバターを塗り、フライパンを温めるんだ」

巧「薄くつてどれくらいだ？」

翔「そこは感だ」

友希那「感って、随分と適当ね」

翔「次にフライパンが温まったら、フライパンの底を濡れ布巾をくっ付けて冷ますんだ」

巧「折角温めたのにか？」

翔「うん、何故か知らないけど一度冷まさないといけないんだ」

リサ「それでこつからが本番だよ☆、弱火にして生地を流し入れてフライパンの蓋を締めるんだよ♪」

リサ「ふつふつとして周りにきつね色に変わったらそのまま、フライ返しでひっくり返すんだよ♪」

翔「裏面もきつね色になったら完成だ」

家庭科の教員「それじゃあ」

＼いただきまーす／

巧「うっ上手いなホットケーキ」

友希那「ええ確かにそうね」

リサ「にしても一時期はどうなることかと思ったよ」

翔「まあ完成したから良くない？」

リサ「それもそうだね☆」

まあたまには皆で料理も悪くないな

再会

はあ、今日はなんて素晴らしい日なんだろう。

アルビオン『どうしたんだ翔何か良いことでも有ったのか?』

ふふっアルビオン、君は分かっているいな今日はなんとはぐれ剣客人情伝の最終回の撮影日なんだ。

何で僕がそんな事を知ってるかって?

それは僕がはぐれ剣客人情伝のエキストラ募集に応募して、受かったからだ!!!

アルビオン『そう言えば、翔はあの時代劇好きだったな』

ああもちろんだ、題名が在り来たりなわりにはストーリーも充実していて何より、テレビだからな映画とは違って他人の声を聞かずにすむからな。

アルビオン『それなら、俳優達の声は大丈夫なのか?』

ああ撮影現場には人が沢山いるからな、聞こうと思っても聞こえないよ、第一映画の場合は応援上映と勘違いしている奴がたまに要るし、次に見る人の事を考えずにネタバレをする奴も結構要るからなそれが嫌なんだ。

アルビオン『そうか、なら京都の時の少女とまた再会するんじゃないか?』

アルビオンこの僕がそこまで調べないほど馬鹿じゃない、原作では千聖の役の子供は出てこないし台本を読んだがそれらしき人物は出てこない。

アルビオン『それなら良いんだけどな』

〈撮影現場〉

監督「突然だが、台本の内容を少し変更する」

嘘だろ監督

翔「本来、白鷺千聖が演じる役は最終回には出てこないが、15万人の視聴者からの要望が有ったので白鷺千聖を最終回に組み込む事にする、尚 話の内容には変化はない」

あんた馬鹿だろ監督いくらストーリーが変わらないって言っても視聴者の要望だけで変えるなよ。

く撮影終了く

ふう疲れたなく、でもやっぱり実際に演じるとなると緊張するな。

(物語の中盤辺りに出てくる只の通行人子供)

何、お前只歩いてただけだろって？確かにそうだけどカメラを向けられると向けられないとじゃあ訳が違うんだぞ！

さて疲れたし帰るか…

???'「ちよつとそこの君待ってくれるかな？」
ん？誰だ。

マネージャー「私は白鷺千聖ちゃんのマネージャーをやっている、

○△×?と云う者です」

なるほど、マネージャーか。

翔「で、僕に何か用ですか？」

マネージャー「あはは、正確には千聖ちゃんが君に用事が有るんだけどね、君に会いたいわってごめんまだ時間有るかな？」

よし、断るか。

翔「すみません、親も心配してると思うので帰らせてもらいますね」
このまま上手くいけば

マネージャー「それについては大丈夫だよ、親御さんに電話したら

家まで送ってくれば良いって」

僕が大丈夫じゃないんだよ、てか何、本人に許可を取らずに勝手に人の予定を埋めないでくれない？

はあ仕方ないか

翔「はいそれなら分かりました」

く控え室く

マネージャー「失礼します、千聖ちゃんいる？、彼を連れて来たんだけど」

千聖「はいわざわざありがとうございます、マネージャーさんちよつと席外してもらって良いですか？」

マネージャー「分かったわ、じゃあしつかり彼と話してね」

そう言うマネージャーさんは控え室から出ていく

千聖「それにしても久しぶりだね白龍」

翔「うん久しぶり千聖」

千聖「じゃあ約束道理本名を教えてください？」

翔「分かったよ僕の本名は木場翔だ」

千聖「そう、改めてよろしくね翔」

翔「うん、よろしく千聖」

翔「それにしても何で僕を呼び出したんだい？」

千聖「うーんそうだな言ってしまうば君に会いたかったからかな」

(ニコツ)

千聖さん？女の子がそんなことを笑顔で簡単に言っちゃいけないと思うのだけれどそういうところどうなの？

千聖「もしかして、君は私に会いたくなかった？」(ウルウル)

ちよつと演技でも止めてくれない？心臓に悪いから、罪悪感で一杯だから、てかそんな顔しないで君が僕のこと好きじゃないかなとか色々勘違いしちやいそうだから。

それから千聖と20分くらい話をして、お互いに連絡先を交換した。

それにしても千聖僕と連絡先を交換した時これ以上に無いほど嬉しそうだった。

はあまたいつも通り騒がしい毎日が始まるのか。

修学旅行1

（翔side）

突然だが僕は小学六年生になった、四年はいくらなんでも飛びすぎだろと思っっていると思うがその間特に変わった事が無かったのだ、普通に授業を受けリサ達と遊びたまにドーパントを倒したりとちよつと変わったいつも通りを過ごしていただけたからな。

赤龍院帝はどうしたって？

彼はこの学校に転校してきてから特に変わった行動を起こさなかつたからな。

アルビオン『だが奴は本当に赤龍帝なのか？赤いのの気配はあつたがそれにはあまりにも弱すぎる気がするのだが』

多分赤龍帝でしょ、只本人が弱いだけで。

アルビオン『そうなのか？』

まあこの話は良いじゃないか、今は修学旅行の班決めの時間なんだから。

アルビオン『確か、旅行先は京都だったな』

ああ、行くのは二年生ぶりかな？

アルビオン『確かそのはずだが』

リサ「おーい☆翔ー♪」

翔「何だ？リサ」

リサ「アタシと友希那と一緒に班組まない？」

翔「うん良いけど、巧も誘って良いか？」

リサ「うんもちろん♪」

翔「巧ちよつと良いか？」

巧「何だ？」

翔「リサに班に入らないかって誘われたんだけどお前も入らないか？」

巧「おう良いぜ、ちよつと俺もお前を誘おうと思ってたんだ」

翔「そうするとあとは男子一人、女子一人か」

友希那「そうね」

リサ「じゃあアタシの友達も入れ良い？」

友希那「ええ」

リサ「それじゃあ呼んでくるね♪」

リサの友達？僕は友希那と一緒にいるところしか見たことないかな想像がつかないまあコミユ力があるし友達がいても不思議じゃないか。

リサ「じゃあ紹介するねっ☆この子がアタシの友達の 神風瑠璃（かみかぜるり）っていうの仲良くしてあげてね♪」

瑠璃「皆さん初めまして神風瑠璃と申します今回は班のお誘い本当にありがとうございます。」

うん美少女だ、しかも性格も清楚系ときた、何だあれか？ラノベのメインヒロインか？

瑠璃「あつあの… その… これからも仲良くしてくれたら…」

翔／巧／友希那「もちろん／もちろんだ／ええよろしく」

リサ「女子は決まったね♪」

翔「残りは男子かー、巧お前知り合いにこの班に入ってくれそうなのじゃないか？」

巧「いやーそれがさ、俺の友達全員班決まっちゃったんだよ」

担任「ちよつと君達、班に男子がいらないなら赤龍院君をこの班に加えてくれないかな？」

まあ取り合えず良いか。

翔「僕は良いですよ、皆は？」

リサ「アタシは別に良いかな」

友希那「私も問題ないわ」

巧「俺も別に」

瑠璃「私も賛成です」

担任「それなら決まりだね」

く自宅く（夜）

ああ早く一ヶ月経たないかなー。

アルビオン『そんなに楽しみなのか？』

もちろんだよアルビオン、前京都に来たときは一人だったけど今回は友達がいるんだ楽しみじゃない訳が無いよ。

アルビオン『そうか、私には分からない感情だな』

アルビオンには友達がないの？

アルビオン『ああ私は二天龍だ、私に並べる者は少なくドライブですら私の倒すべき敵になってしまった』

何でアルビオンとドライブは長い間ずっと戦い続けているの？

アルビオン『もう随分と昔の事だどつくに忘れたよ』

忘れたのに、戦い続けているの？

アルビオン『ああ、下らん意地だよお互いに認めあってるがお互いに競い会うそんな関係だよ赤いのは』

へえー、何か変だね。

アルビオン『ふん、確かにな』

アルビオン『でもいずれ翔にもそう思える人間に出会えるさ』

全然そんな気はしないけどね。

アルビオン『さあいくら私にも未来の出来事は分からないがきつとな』

ふああなんだか眠たいな。

アルビオン『もうそろそろ0時になるぞ寝た方が良いんじゃないか』

あつホントだお休みアルビオン。

アルビオン『お休み、翔』

修学旅行2

（翔side）

さあついに始まった修学旅行、さつきまで皆楽しみにしていたが、まさかこの新幹線が最悪の場所に連れて行く乗り物だとは誰もきずかずに。

（新幹線内）

担任「皆さん、ちゃんと指定席に座って下さいね」

リサ「ねえ友希那、瑠璃、修学旅行本当に楽しみだよ☆」

友希那「ええ、そうね」

瑠璃「うん、そうだね」

巧「ふん、修学旅行などどうでも良いな、そうだ翔修学旅行中一緒にサボらないか？」

翔「いやー先生に注意されるしそれはそれで面倒くさいし」

何故、赤龍院帝が嫌われているには理由がある。

それは…

リサ「あつれー可笑しいな？」

友希那「どうしたの？リサ」

リサ「あつ友希那、それがさーしおり家に置いてきちやつたんだよね」

帝「へえーそうなんだ」

リサ「赤龍院君…」

帝「仕方ない俺のを貸してやるよ感謝しろよ」

リサ「あ、ありがとう…」

帝「当然だ」

そう、上から目線なのだ。

これが赤龍院帝が嫌われている一つ目の理由なのだ。

もうひとつは…

帝「グへへへ、さすがは俺の嫁だ美少女で料理も出来ると言う完璧スペックを持ちながらおつちよこちよいと言うギャップもある、なん

て可愛いんだにしても今夜は楽しみだなまあ夫である俺が嫁の裸を見てもなにも問題は無いだろ)」

いや、普通に問題あるよ。

これが二つ目の嫌われている理由変態なのだ。

読者の皆も思うことだろう、変態でも顔に出さなければ良い話じゃないかと。

それが本人は隠してるつもりだろうが全然隠しきれてないのだ。

リサ「(うわあくまたアタシのこと変な目で見てるよ正直に言ってみて気持ち悪いなあ)」

こういう事なのだ、因みにリサに向ける視線が一番問題があるが他の女子に向ける視線もかなり問題がある。

巧「(またアイツリサに変な視線送りやがって早く中学生にならねえかな)」

巧ですらこれだ。

よし、空気を変えるか。

翔「そうだ、自由時間にして過ごす？」

友希那「そうね、やはり金閣寺に行きたいわ」

リサ「やっぱりー、アタシ的には地主神社かなー」

瑠璃「あ、その神社って恋占いの石が有名な所だよねリサさんは誰か好きな人でもいるのですか？」

リサ「いやそんなんじゃないよ／＼／ただちよつと気になる人がいるだけで／＼／」

リサ「(言えるわけないよ翔の事が好きだなんて／＼／)」

帝「(恥ずかしがっているとこちらも可愛いなまあそれもそうか言えるはずもないよな俺の事が好きだったて事を)」

巧「俺は嵐山に行きたいな！ガイドブックに載ってた竹林が綺麗だったし」

翔「それ僕も行ってみたい」

巧「やっぱり？じゃあ自由時間一緒に行こうぜ」

瑠璃「私は銀閣寺に行きたいです…家の庭の参考にしたかったのでリサ「そう言えば瑠璃の家って和風の庭があったんだけ？」」

瑠璃「はい、父の趣味で…それに私も影響を受けて」

帝「俺は正直どこでも良いな（ホテルで風呂を覗けるし）」

どこでも良いなら言うなよ、あと風呂を覗くのをまだ諦めて無かったのかよ。

翔「やっぱり、僕は清水寺に行ってみたいな」

リサ「それなら、清水寺二人で一緒に行かない？ちよつと大事な話があるから」

とりサはヒソヒソ話で言ってくる。

翔「うん、良いよ」

リサ「やった☆約束だからね♪」

それから僕らは様々な話をして時間を潰していた。

くホテルく

担任「それでは各自、班ごとに自由行動をとって下さい」

リサ「それじゃあそれぞれ荷物を部屋に置いていこうよ♪」

友希那／瑠璃／巧／翔／帝「ええ／うん／だな／そうだね／ああ

」

…はあこれから面倒なことになりそうだな。

修学旅行3

↳翔side

↳金閣寺

瑠璃「写真で見た通り素敵なお所ですね」

友希那「そうね」

巧「友希那は前に金閣寺を見に来たことあるのか？」

友希那「ええ、私の両親とリサの両親とね」

リサ「そうだね☆確か五年前だっけ？」

友希那「そのはずよ」

翔「にしても僕達はそろそろ卒業かあ」

巧「三月だよな卒業式…」

翔「…うん」

リサ「ねえ皆」

友希那「ん？どうかしたのリサ」

リサ「小学校を卒業しても皆ずっと友達だよね」

巧「なに当たり前な事言ってるんだよ友達決まってるだろ」

友希那「そうよ」

瑠璃「うん」

翔「そうだよにしても突然どうしたの？リサらしくもない質問して」

リサ「いや、アタシや友希那や瑠璃は羽丘女子学園を受験するじゃん、そして翔と巧は近くの公立中学校に入学して皆バラバラになっちゃうじゃ無いかってずっと怖くて、だから…」

※（この時点では羽丘女子学園はまだ女子校です）

ああそうかりサはずっと不安だったのか… 友達の悩みにもきざいてやれないなんて全く友達失格だな。

翔「リサ」

リサ「グッスなに？」

翔「よしよし」（ナデナデ）

リサ「え、なっ何どうしたの行き成り頭を撫で始めて恥ずかしいよ

／＼／

僕が今一番しなくちやいけないことそれは…心からの謝罪だ。

翔「良く一人で頑張ったな、辛かったよな、苦しかったよな、頼りたかったよな、そしてごめんな、リサの悩みにきずいてやれなくて、これからはもっと僕のことを頼ってほしい僕が頼りないと感じたら友希那や瑠璃や巧を

頼ってほしい」

リサ「グッスうんありがとうこれは頼りにさせてもらうね翔♪」
(ああだからアタシ翔のことを好きになったんだ)

リサ「ねえ翔」

翔「なんだ？リサ」

リサ「もうしばらく、頭撫でてくれないかな」

翔「そんな事か良いよ」

リサ「ん、ありがとう」

そうして僕はリサが満足するまで頭を撫で続けた

くホテルく

あれ、銀閣寺や嵐山はどうしたって思っているだろう、普通に観光したぞ。

因みに明日は地主神社と清水寺だ。

巧「翔くそろそろ風呂行こうぜ！」

翔「分かったよ、すぐ行く」

く男湯く

巧「ふうーいい湯だな」

翔「巧おっさんみたいだよ」

巧「うっせ俺はまだ小6だ」

でも確かにいい湯だな。

巧「あれ？赤龍院はどうした？」

翔「ああ赤龍院君はあそこ」

僕は女湯側に不気味な笑みを浮かべている赤龍院に指を指した。

巧「ん？」

帝「(グヘヘ、ついにこの日が来たぜ折角の修学旅行だ覗きくらいセーフだろ)」

余裕でアウトだよ

巧「っアイツ」

翔「安心しろもう通報してある」

警備員「君、そこで何をしている」

帝「え、いや別に何も(げっ何でバレた)」

嘘をつくな。

警備員「じゃあその手に持っているものは何だ」

そう、赤龍院の手には一眼レフのカメラがあったのだ。

帝「カメラですけど」

警備員「何で持ってる」

帝「修学旅行の思い出を撮るために」

無理があるだろ、なんだよ風呂場での修学旅行の思い出って、第一風呂場にカメラって場違いにもほどがあるだろ。

警備員「まあいい取り合えず話は聞くからちよつと一緒に来てもらおう」

帝「ま、待って下さい(クツソ何なんだよモブの癖にオリ主である俺に楯突きやがって別に良いじゃないか主人公が ヒロインの裸を見ても兵藤一誠は全く責められなかったぞ…)」

そう言う赤龍院は警備員に捕まり何処かへ連れていかれた。

翔「ああ通報した僕が言うのもあれだけど大丈夫かな？赤龍院君」

巧「大丈夫だろ、しばらく部屋に來なそうだし部屋を広く使えるって考えれば」

翔「そうかな？」

巧「自業自得だっと思えよ別に翔は悪いことをしたわけじゃないし、それより自由時間何して過ごす？」

翔「やっぱりトランプかUNOじゃない？」

巧「だよな、でも二人でやるとつまらなくないか？」

翔「そうするとリサ達も誘う？」

巧「そうするか」

翔「ねえそろそろ上がらない？」

巧「だな」

そうして、僕達は風呂から上がりちょうどリサ達も風呂かららしく自由時間一緒に遊ばないかと誘うとリサ達もそのつもりだったらしく一緒に遊ぶことになった。

番外編 鏡の世界1

くミラーワールドく

アナザーリユウガ『はあああツツ』

グオオオオオ

アナザー龍騎『ガアアアア』

翔「くっこのままじゃ」

アナザーリユウガ『どうした、もう一人の俺もう終わりか?』

翔「まだだ!」

アナザーリユウガ『いや、もう終わりだじゃあなもう一人の俺、お前を殺して俺が本物になる』

この状態になったのを説明するには数日前に遡る必要がある。

く数日前く

翔「げほっごほっ」

僕こと木場翔は現在風邪をひいている。

まあアナザーエグゼイドの能力を使えば風邪など簡単に治療出来る、それが出来ないのには理由があるそれは……

回想く数分前く

ううん何だろう体が重いな。

アルビオン『多分風邪じゃないか?』

あ、アルビオン久しぶりの登場だな。

アルビオン『おい、メタいぞ』

別に良いじゃん。

アルビオン『…良いのか？』

それにしても風邪かぁー。

アルビオン『仕方あるまい翔も人間なんだ風邪くらいひくだろう』
まあアナザーエグゼイドの能力で治すか。

祖母「翔君そろそろ起きたらどうです？朝ですよ」
げ、祖母。

翔「うん分かったよお祖母ちゃん」

祖母「あら？翔君顔が赤いわよそれに足もふらついているし」

翔「だ、大丈夫だよ」

祖母「ちよつと待ってて直ぐに体温計持ってくるから」

祖母「あら、38度もあるじゃない」

翔「これくらい大丈夫だって」

祖母「いえだめです学校にはお祖母ちゃんが電話しておくから翔君はゆっくり休んでいなさい」

〜回想終了〜

という訳だ、別に僕も前世も含めて学校が特別好きって訳じゃないが病気で休んでいるときあるあるだと思いが単純に暇なのだ。

祝日とは違って友達や学校にいて一緒に遊べないし、かといって何処かに出掛けようにも親は許してくれないという地獄。

それに加え今僕は祖母にゲームを没収されている。

正直な話やることがないのだ。

恐らく昼御飯も味の薄いお粥やうどんだろう。

じゃあ寝れば良いんじゃないかって読者の皆も思っているだろうがそれは無理だ。

昨日寝たのが22:00で起きたのが06:00今現在の時刻は08:00絶賛脳内が活性中なのだ。

アルビオン『それなら修行をしたらどうだ？』

と言ってもねアルビオンどうやって修行をするのさ、僕は今家から

出れないし。

アルビオン 『別に難しいことじゃないさ、精神世界で修行をすれば良い』

精神世界って今アルビオンとい話しているこの空間のことだろ。

アルビオン 『それもあるがもうひとつアナザーライダーと戦える精神世界が存在する』

そうなのか？

アルビオン 『ああ』

じゃあ暇だしその精神世界に送ってくれ。

アルビオン 『分かった、それなら目を瞑ってくれ』

アルビオンがそう言うと言と僕の視界が暗転した

修学旅行4

く翔sideく

くホテル?く

僕はリサ達とランプやUNOをしたあとに神風さんにちよつと話があるから付き合っただけと言われた。

瑠璃「お忙しい中お呼び出ししてしまい申し訳ございません」

翔「それで、話して何かね?」

瑠璃「単刀直入に言いますね...」

神風さんは真剣な面立ちで口を開く。

瑠璃「貴方、転生者ですよ」

その言葉を聞いた瞬間僕の思考は停止した。
理解出来なかった。

何でこの女が僕が転生者と言うことを知っている?

翔「ああ確かにそうだよ」

瑠璃「やっぱり...」

神風さんは然程表情を変えていない。

翔「そう言う質問をする君も転生者なんだろう」

瑠璃「ええ私も貴方と同じく転生者です」

翔「そうか... 結局僕を呼び出した理由は転生者かどうかの確認だけかな?」

瑠璃「それも有ります。ですが一番の理由は... 私と戦って欲しいのです」

翔「いや、僕らに戦う理由何てないだろう」

戦う理由はない。これは明らか事実だ... 僕はリサ達と出会って変わった。無駄な争いをしてもお互いが苦しみ、悲しみを生んでしまう。

瑠璃「確かにそうですね」

神風さんも分かってくれ...。

瑠璃「それならリサさん達を殺しましょう。リサさん達を殺せば貴方は戦ってくれると思いますから」

は？このオンナイマナンツツタ…リサ達を殺す？フザケルナヨ…。

恐らくこの発言は挑発なのだろうダガ僕にもガマン出来るモノトデキナイモノがある。

翔「ナアオマエそんなにボクトオ戦いたいノカア…ならイイゼエ相手にナツテヤル」

《ジョウ…》

瑠璃「フフフフ…」

神風が不気味に笑う。

瑠璃「アハハハハハハハ、それでこそ復讐者…怒り狂ったそつちの姿の方が様になっていきますよ」

神風はそう言うのと地を蹴り僕の方へと凄まじい速度で向かってきた。

よく見ると神風が立っていた場所を中心に地面が半径5mくらい割れていた。

次の瞬間目を思いつきり開き、右手に拳を作り大きく振りかぶった。

僕は危機を感じ急いでバックダツシユをして距離を取った。

神風は止まらずにそのまま地面を殴った。

ドゴオオオオ!!とけたたましい音が僕の鼓膜を揺らす。

そこを見ると地面に大きな穴が開いていた。

神風の枝のような細い腕ではどう考えても硬い地面を壊すことなど普通に考えて不可能だ…。

やはり、特典の影響だろうか。

…いやちよつと待て、此処がホテルだとしたら可笑しい、を壊したらどう考えても警備員が来るはずだし、僕がアナザージョウウになった時点で監視カメラにその姿が映り下手したら国家クラスの問題になる…まさか。

瑠璃「やつと気づきましたか？」

翔「ああ気づいたよ此処がホテルではなくお前もしくはお前の協力者が造り出した空間だつてことくらい」

瑠璃「そうここは貴方と私が戦う為に造った異空間です」
瑠璃「さあ戦いの続きと行きましようか」